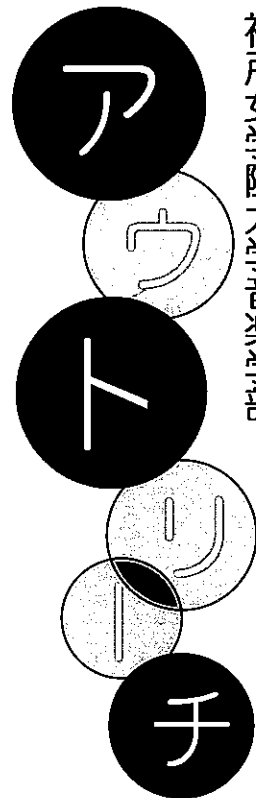


神戸女学院大学音楽学部



第 12 号
2008 年 11 月 20 日発行
年 3 回発行
神戸女学院大学音楽学部
アウトリーチ・センター
〒662-8505
西宮市岡田山 4-1
電話・FAX: 0798-51-8584

子どものための コンサート・シリーズ

第二十一回 セタコンサート



七月五日(土)、本学講堂にて「子どものためのセタコンサート」(子どもたちのためのコンサート・シリーズ第二十一回)を開催

しました(第一部十一時、第二部十五時、来場者数七二三名)。

「音楽によるアウトリーチ」履修生(四年生)六名と賛助出演七名の総勢十三名が出演。織姫と彦星のストーリーを題材に、ピアノ・フルート・ヴァイオリン・クラリネットのアンサンブル、重唱やマリリンのソロなど多彩な組み合わせでお届けしました(声楽・藤田理世、金岡伶奈、先間恵子、フルート・中村亜彌子、ピアノ・井上智恵子、友田麻衣加、南方今日子、式地紗綾香、山本あゆ、和田梢、ヴァイオリン・東瑛子、マリリン・金鹿千紘、クラリネット・田中富規子)。

モーツァルトの歌劇《フィガロの結婚》序曲で幕開け。下総院一(たなばたさま)を三重唱で歌った後、この曲をピアノで演奏しながらセタのお話をしました。織姫が登場して、彦星に連絡しようとして携帯電話を取り出しますが、なぜか通じません。振りすぎて携帯電話が飛んで壊れてしまいます。クラリネット独奏で

フランス童謡クラリネットをこわしやつた、ピアノ連弾でプロコフィエフの組曲《ロミオとジュリエット》より《モンタギュー家とキャピレット家》と、ドヴォルザークの《スラブ舞曲》作品七二二、マリリン独奏で《星に願いを》と各楽器の音色を生かした曲で盛り上げます。

モーツァルトの歌劇《魔笛》より夜の女王のアリア《地獄の復讐が私の心の中で》を歌って魔女が登場。魔女は織姫と彦星が会えるよう、魔法の言葉《ビデ・パビデ・ブルー》を会場の子どもたちと声を合わせて歌いました。



妖精も登場して、織姫とモーツァルト《フィガロの結婚》より《手紙の二重唱》を歌い、アンダーソン《タイプライター》で彦星へ手紙をしたためる場面を表

現。それを受け取って読んだ彦星はいよいよ織姫のもとへ。無事再会を果たすことができた二人はレハール《メリー・ウィドウ・ワルツ》の音楽で天の川へと出かけていきます。最後はモーツァルト《きらきら星変奏曲》を会場の皆さんと歌って締めくくりました。

副題にもあるように、今回のねらいは「きらきら輝く音楽との出逢い」を子どもたちと共有すること。子どもたちが飽きずに集中して聴くことができるよう、楽しかったと思ってもらえるプログラム作りを目指しました。馴染みのある曲や今話題の曲を随所に取り入れたり、ナレーションも特訓を受けたりして、よりよく言葉を伝えられるよう練習しました。

演出にもひと工夫。「現代風・織姫と彦星のセタデート」という趣向に沿って、おもしろく、かつ矛盾の少ないストーリーを考えました。劇をさらに盛り上げるために、織姫が彦星に連絡をとるための携帯電話、織姫の羽衣のストール、タイプライター、手紙、待ち合わせの場所を示す「天の川七丁目」の看板などの小道具も用意しました。

準備は非常に大切で、いくらやつても足りないという位でなければならなかった。当日に何か変更やハプニングがあっても臨機応変に対応できるだけの余裕を持てるよう準備しておかなければいけないと感じました。



お客様からは「楽しかった」という声をたくさん頂いて、大きな達成感を得ることができました。スタッフや出演者（特に賛助出演の友人たち）からもやりがいがあったよと言ってもらえて、こんなコンサートを生み出した私たちはすごい！と思えました。何より、子どもたちが帰り際に笑顔で「ありがとう」と言ってくれたのが嬉しく、大成功のコンサートとなりました。

（井上智恵子・記）

アウトリーチ実習報告

神戸市立医療センター

中央市民病院

九月四日（木）、神戸市立医療センター中央市民病院神戸市中央区港島中町四一六の院内コンサート（四十分）に出演しました（声楽・藤田理世、先間恵子、フルート・中村亜彌子、ピアノ・小林延江、美馬裕子）。患者の皆様は日本と世界各地を巡った気分を味わって頂こうと、写真や地図も用意し、各地の特徴を感じられるよう考えました。



まず日本の音楽から、北原白秋が北海道を旅した思ひ出を綴った（この道）、兵庫県龍野市生まれの三木露風が作詞した（赤とんぼ、宝塚歌劇を象徴する（すみれの花咲く頃）（デレー／白井鉄造）、沖縄での経験から嘉納昌吉が平和を祈って作曲した（花々すべての人の心に花を）を演奏。北は北海道から南は沖縄まで、特に、ここ兵庫にゆかりのある曲を中心に演奏しました。

次は世界の音楽へ。イタリアからカプア／カプロ（オー・ソレ・ミオ）、ドイツからモーツァルト（手紙の二重唱）、ドイツで生まれ、イタリアとイギリスでも活躍したヘンデルの歌劇《リナルド》より（私を泣かせてください）、チエシ生まれのドヴォルザークのピアノ連弾曲《ボヘミアの森から》より（騒がしい時）、そしてアメリカからは（踊り明かそう）や（ムーミン・リバー）といった映画音楽やミュージカル作品をお届けしました。

隣りの患者さんの手をとって歌われた方、一緒に口ずさんで下さった方、この道やアンコールの（里の秋）を涙を流しながら歌って下さった方もあって、こちらも

感動しました。温かく「ありがとう」と言ってもらったのがうれしかったです。また準備の過程では、訪問先に合わせてどのような話し方をするのかなど学ぶことも多かったです。今回得たことを次回に活かしていきたいと思っています。

（中村亜彌子・記）

西宮市立夙川幼稚園



九月十一日（木）、西宮市立夙川幼稚園（藤井久美子園長、西宮市松ヶ丘町九一二十三）にて「秋のコンサート」に出演しました（声楽・藤田理世、金岡怜奈、ピアノ・大澤侑子、友田麻衣加）。今回は「動物」をテーマに、子どもたちに参加してもらえらるプログラムを考えました。

まずチャーチル（ハイホー）で開幕し、ロッシ（ニ猫の二重唱）では歌の二人が猫の耳としっぽをつけて幕の両脇から登場。全曲が二匹の猫の掛け合いでできている何ともおもしろい曲です。ドイツ民謡（山の音楽家）では様々な動物が登場。「好きな動物が出て来たら、手を叩いて一緒に歌ってね」と声をかけると、子ども

もたちは喜んで参加してくれました。続いてサン・サーンス《動物の謝肉祭》より（象をピアノ連弾で、ベネディクト（みそさざい）「a cat in the hat」をソプラノ独唱で演奏。「どんな動物かな？」とクイズ形式にしたところ、それぞれの動物のイメージを子どもたちは的確に感じて当ててくれました。最後に、アメリカ民謡（森のくまさん）と越部信義（おもちゃのチャチャチャ）を全員で歌って締め括りました。

幼稚園での実習は初めてだったので、子どもたちを飽きさせないようにクイズを入れたり、想像力をかきたてる話し方を工夫したりしました。子どもたちは多様な反応を返してくれましたが、中には思いもよらない返事もあり、その想像力に驚きました。子どもたちが体全体で音楽を楽しんでいる姿をみて、音楽に触れることの価値を改めて感じました。

実は準備したプログラムがリハーサルでは二十分で終わってしまい、与えられた三十分のコンサート枠を満たせないのではないかと不安に思いましたが、リハーサル時のアドバイスを生かして、子どもたちとじっくり繰り返し曲を楽しむことによつて丁度の時間で終わることができました。曲数の多さに頼らなくてもよいプログラムを作ることができるとを学びました。

（友田麻衣加・記）

甲東デイスカス・センター



九月十八日(木)、甲東デイスカス・センター(西宮市上甲東園二一十一六十)にて、施設利用者を対象とした「秋のコンサート」に出演しました(声楽・先間恵子、奥田敏子、ピアノ・田村徳子)。声楽専攻生が二人出演するので、オペラの二重唱などを組み入れたプログラム(四十分)を準備しました。

まず、二重唱で「浜辺の歌」、独唱でカプアノカプロ(オー・ソレ・ミオ)を演奏した後、秋にちなむ三曲(小さい秋見つけた)、「里の秋」、「紅葉」を聴衆の皆さんと一緒に歌いました。中程に「体操コーナ」を設け、ずっと座っている皆様の体をほぐして少しリフレッシュ。リスト(愛の夢第三番)をピアノ・ソロで演奏した後、ロジャース/ハーマステイン二世(シヤル・ウィ・ダンス)、モーツァルト(手紙の二重唱)、フンパーディングの歌劇(ヘンゼルとグレー

テル)より「こうして踊る」など多彩な二重唱をお届けしました。アンコールは團伊玖磨/江間章子(花の街)。

予想以上に聴衆の皆さんとの距離が近かったのが最初は緊張しましたが、温かい雰囲気の中で聴いて下さったので、リラックスして楽しんで演奏することができました。アンコール後、もう一度「里の秋」を一緒に歌って下さったのは嬉しかったです。センターの方からは「今後でもできる限り来てほしい」と言ってもらえましたし、私たちも成長することのできた演奏会でした。ご協力くださいました施設の皆様、ありがとうございました。(先間恵子・記)

講演会シリーズ

仲道郁代氏

六月六日(金)、本学音楽館ホールにてピアノスト仲道郁代氏をお迎えしてレクチャー・コンサートを開催しました。

今回で四回目となる講演会のテーマは「ベートーヴェンとイメージ」。仲道さんがライフワークとして全曲演奏に取り組んでいらつしやるベートーヴェンのソナタについて、その音楽のイメージと演奏という視点から、実際の演奏を交えながらお話を頂きました。



まず、ベートーヴェンのソナタ全三十二作品の大きな流れについてのお話。ベートーヴェンの試みを読み解くことで、何を伝えようとしたのかを掴み出していきます。後のオーケストラ作品や弦楽四重奏曲等につながる特徴を持ったフレーズの出現、楽章構成や調性の特徴と留意点、楽想記号の表記、標題などの視点から各作品を分析していきました。

例えば「月光」。形式面などでベートーヴェンが大きな試みを行い、感情の形式さえもが書き込まれるようになった作品です。この曲は、各楽章のテンポ設定の新しいさ、第一楽章に現れるモティーフが他楽章でも用いられることで、各楽章が関連性をもつて展開されているといったおもしろさがあります。

楽譜を深く読み込むほどに、ベートーヴェンがいかに緻密な作品作りを行なったかを理解することができました。そうした理解が、ベートーヴェンの作品をどう演奏するかのヒントになり、その解釈一つで演奏が全く違うものになっていくことを仲道さんの演奏を通して感じることもできました。各ソナタの特徴が明らかに

かなるばかりでなく、全三十二曲の大きな関連性が見えてきて、大変興味深く感じました。



レクチャー・コンサート後、本学学生とのデイスカスセッションの場を設けました。今回のレクチャーから感じたこと、学んだこと、疑問点などを学生が発言すると、そこから問題の核心を読み取って丁寧に答えて下さいました。「子どものための七タコンサート」を間近に控えていたので、よりよい演奏会にするための助言も仲道さんから頂きました。曲に対する子どもたちのイメージを限定してしまわないこと、体を動かしたりリズムで遊んだり、子どもたちがアクティブに入り込める部分を組み入れてプログラムにメリハリをつけることなど、仲道さんのこれまでの経験からさまざまなアドバイスを頂きました。

レクチャー・コンサートとデイスカスセッションとで、年に一回の貴重な仲道さんとの時間がより充実した有意義なものになりました。(寺澤彩・記)

ワークシヨップ

グレゴリー先生ワークシヨップと

第二回「音で遊ぶ」

アウトリーチ・センター長
「音楽によるアウトリーチ」授業担当者

津上 智実

七月二十二日から五日間、英国ロンドンのギルドホール音楽院からシヨーン・グレゴリー先生(作曲家、プロフェッショナル・ディヴィジョン・ディプロマ・ディプロマ・ディプロマ・ディプロマ)をお迎えして音楽作りワークシヨップを行いました。これは昨年十一月に続いて二度目です。

七月二十二日朝、成田空港に着いたグレゴリー先生は女学院に直行して通訳コースとのブリーフィングをこなし、夕方六時半からさっそく第一回のセッションを学生たちと持ちました。

受講者はアウトリーチ履修生(四年生)が中心で、ほとんどが昨秋のワークシヨップの経験者です。飛び入りの下級生や大学院生、それにこの春の卒業生も参加して(わざわざ広島から駆けつけてくれた人もいました)総勢二十五名、和気あいあいと進みます。

参加者全員が大きく円形に並んでのウォーミング・アップ、クラッピング、即興によるリズム遊び、名前のゲームといった基本をおさらいした後、今年のテーマ「惑星(プラネット)」へ進みました。これはギルドホール音楽院がロンドンで地域の



子どもたちを巻き込んで展開しているプロジェクト「コネクト」の「ワークタウン」プロジェクトの今年、ロンドンでの実践の様子

子を録画で一部見せて頂きました。「ワークタウン」では、ロンドン市内東部の小中高校での活動に加えて、同一のテーマによつて全国各地で各々のセッションを積み上げた上で、最後にギルドホール音楽院のホールに集まって合同演奏という形で共同の音楽作りの場を持つという大きな構想のプロジェクトを年々展開しています。女学院の学生たちも先々自分たちの音楽的アイディアを引っさげてロンドンに赴き、「ワークタウン」プロジェクトの一翼を担うことができれば、と思わず夢をふくらませてしまいました。

さて、学生を三つのグループに分けて「惑星(プラネット)」というテーマで自由にイメージを挙げてもらったところ、びっくりするほどたくさんアイディアが出てきて、それらが(一)近未来の惑星、(二)黄色い花の小さな惑星、(三)二面性をもつ惑星、という三つの惑星に収斂しました。例えば「近未来の惑星」では「霧に包まれている」「金粉がキラキラしている」「二本足の住人たちがいる」「王子様と王女様の仲が悪い」「仲直りする」と

いったアイディアが出されて、それが「ヴァイオリンや打楽器をこする音」「パーカッションのキラキラした音」「木魚で八拍子を刻む」「ぶつかりあう和音を弾く」「デュエットする」といった音楽的なアイディアに転換されていきます。どんなに突飛なアイディアでも否定せずに受け入れて、それらを巧みに音楽的に意味のあるものに導いていくグレゴリー先生の懐の深さに改めて感じ入りました。

また学生たちから歌詞と旋律のアイディアを引き出して、歌も四種類ができました。(一)「Let's go to the space, tada!」、(二)「みんな友だち、みんな友だち、エイ!」、(三)「はるかな宇宙の旅、あふれる思い、止まらない」、(四)「Falling stars, shooting stars」の四種類ですが、いずれも八小節で、同じ和声反復の上で自由に創作したもので、どのようにも組み合わせることが出来ます。なお「はるかな宇宙の旅、あふれる思い、止まらない」には踊りの振りまでつきました。

こうして四日間かけて学んだ音楽作りのプロセスを、学生たちが子どもたちを相手に実践する場として、最終日の二十六日(土)に第二回「子どもたちのための音楽作りワークシヨップ、音で遊ぶ」を音楽館ホールで開催しました。近隣の子ども



たち十三人が参加してくれて、朝十時から夕方五時まで、一日かけて参加者全員で曲を作っていました。学生にとっては正に仕上げのワークシヨップで、子どもたちとコミュニケーションを取るから始めて、音楽的なアイディアを引き出したり、それらをうまく整理したりといったことに真剣に取り組んで汗をかいていました。



最終的に出来

上がったのはストーリーの大きな曲で、お迎えの保護者の皆様を前に、一日の成果披露のミニコンサートを行いました。全体は、神戸で宇宙船を作った船出し、三つの惑星を巡って、最後に地球に戻ってくるという筋です。まずパーカッションで宇宙船を作っている様子を表現し、次に歌で出発します(四年生の中村亜彌子さんの指揮で、上記の四つの歌を順に歌った後、次々に重ねていきます)。続いて、三つのグループが各々作った曲を順に披露し(子どもたちもピアノやリコーダー、パーカッションなどで自分たちのアイディアを披露して活躍)、様々な楽器のアンサンブルで地球に帰還して、最後にお祝いの歌を歌いました。これは南アフリカの「マリーズウェイ、ブレレカヤ、ティナツセフナツハ」という歌で、手拍子や足のステップ

も加わり、テンポを上げて盛り上がって終わりました。

学生からは「なかなか打ち解けてくれない子がいて苦労したが、午後には仲良くなれたのでうれしかった」「子どもたちが次々とアイデアを出してくるので、交通整理が大変だったがやりがいがあった」、子どもたちからは「楽しかった」「またやりたい」との声がありました。

今回も前回と同様、本学大学院文学研究科の通訳・翻訳コースの皆様が同時通訳で支えて頂きました。四日間にわたって会場を提供して頂いためぐみ同窓会館にも御礼申し上げます。

西宮市立西宮浜小学校の高橋詩穂先生がブルー指導などで多忙の中、連日熱心に通って来られて、学生たちにはよい刺激になりました。教員試験の受験を控えた学生の中には、いろいろと質問して経験談を聞かせて頂いた者もいます。

最終日には東京音楽大学の武石みどり先生（アクト・プロジェクト・マネジャー）と朝日新聞社の宮田由美子さん（事業本部・朝日ホール企画営業担当）が見学に来られ、武石先生は子どもたちと一緒に楽しそうにワークシヨップの輪に加わって下さいました。

文部科学省からの特色GP補助金も今年度限りですが、音楽を介した「ミニミニシヨップ」の意味と可能性を大きく豊かに開いてくれるギルドホール音楽院の教育システムとの連携は、今後もぜひ続けていきたいと思っています。関係各位のご理解とご協力をお願い致します。

なお、昨秋の第一回ワークシヨップで才能を見出されたヴァイオリン専攻の東瑛子さんは、この九月からギルドホール音楽院修士課程に授業料半額免除の奨学生として留学しました。女学院の大学院音楽研究科を休学して、二年間で「リーダーシヨップ修士号」を取得して頂く予定です。ご期待ください。

「子どもの詩コンクール」報告

津上 智実

今秋の「子どものためのスペシャル・コンサート」すてきだね、日本語の歌！（八頁参照）の事前企画として「子どもの詩コンクール」作品募集を四月三〜二十四日に行ったところ、十五都府県（福岡県、広島県、岡山県、香川県、高知県、兵庫県、京都府、大阪府、奈良県、和歌山県、愛知県、神奈川県、東京都、埼玉県、千葉県）から、小学生の部二百四十五通、中学生の部百四十五通、高校生部四十四通、計四百三十四通の応募を頂きました。厳正な審査の結果、入賞者十八人が決まりました。審査は、応募者の学年と居住地の都道府県名のみを開示して、他の情報はすべて伏せたままで行ないました。審査委員と担当部門、入賞者は次の通りです。

【小学生の部】

審査員

松岡享子／東京子ども図書館理事長

（子どもの詩コンクール）審査委員長

津上智実／本学音楽学部教授、音楽学

アウトリーチ・センター長

優秀賞 および 特賞

「わたしのなまえ」 阪本歩美

西宮市立瓦林小学校三年生（兵庫県）

佳作 および 松岡享子賞

「ゆめちゃんだいすき」 福井悠人

姫路市立津田小学校二年生（兵庫県）

佳作 および 東直子賞

「しずおかのばあちゃん」 露木堅太

西宮市立瓦林小学校三年生（兵庫県）

佳作

「木の歌」 ライアンリオナ

中野区立江原小学校五年生（東京都）

「心の中」 福村美羽

亀岡市立曽我部小学校三年生（京都府）

「たいかんかけあし」 浅井健

追手門学院小学校四年生（大阪府）

【中学生の部】

審査員

松田高志／本学名誉教授

教育学（子どもの人間学）

蔵中さやか／本学文学部総合文化学科准教授、日本古典文学

優秀賞

「旅立ち」 稲田つばさ

西宮市立平木中学校二年生（兵庫県）

佳作

「贈る言葉」 熊谷麻鈴

神戸市立平野中学校三年生（兵庫県）

「自分を信じて」 安納美奈

明治学園中学校一年生（福岡県）

「知らない世界」 高嶋由佳

明治学園中学校一年生（福岡県）

「大切なもの」 阿部七海

神戸市立住吉中学校二年生（兵庫県）

「見えないけれど」 山岸優太

西宮市立上甲子園中学校二年生（兵庫県）

【高校生の部】

審査員

東直子／歌人、小説家

山本圭一／神戸女学院中高部国語科教員

優秀賞

「あなたの優しい涙と微笑み」 若山沙織

神戸女学院高等学校三年生（兵庫県）

佳作

「恵み」 加渡万紀子

松蔭高等学校三年生（兵庫県）

「おはようどおりがとう」 中井彩映子

兵庫県立芦屋国際中等教育学校六年生

「朝の裏側」 内田紅葉子

神戸女学院高等学校一年生（兵庫県）

「丸い私」 飯島里英
横浜市立戸塚高等学校三年生(神奈川県)

「ことば」 福田優香

兵庫県立相生産業高等学校三年生

この内、特賞に選ばれた詩には曲をつけて二回のコンサート(神戸公演および東京公演)で演奏します。神戸公演では、審査員特別賞(松岡享子賞と東直子賞)の作詩者による詩の朗読、中学生の部および高校生部の優秀賞にも曲をつけて、特賞作と共に新作初演を行います。作曲者は次の三名です。

「わたしのなまえ」
澤内 崇 作曲家

本学音楽学部教授、学科長

「旅立ち」
石黒 晶 作曲家、本学音楽学部教授

「あなたの優しい涙と微笑み」
中村 健 指揮者、本学音楽学部教授

初演は「わたしのなまえ」が釜洞祐子(ソプラノ、東京音楽大学教授、本学卒業生)、「旅立ち」と「あなたの優しい涙と微笑み」が斎藤言子(ソプラノ、本学音楽学部教授)、伴奏はいずれも作曲者自身が行なう予定です。

なお、このコンクールの結果は七月一七日(木)の神戸新聞阪神版(二十七面)に掲載されました。

子どもの詩コンクール審査を終えて

審査委員長 松岡 享子

このたびの「子どもの詩コンクール」は初めての試みであり、広報のための時間も募集期間も十分ではなかったため、どれほどの応募があるか心配でした。でも蓋を開けてみると、短期間にたくさんの方の応募があり、関係者一同とてもうれしく思いました。

私は、主に小学生からの応募作品を読ませていただきました。最終審査のときには、第一次審査を通過した中学生、高校生の作品も拝見しました。身の回りの自然をうたったもの、心の中のつぶやきをことばにしたもの、日常生活のなかに何かを発見したときの驚きや喜びを記したもの……作品は、どれもすなおに表現されていて、審査員の私たちも、作者のみなさんの気持ちに寄りそいながら、たのしませていただきました。

審査を終えての感想といえますか、みなさんへの注文があるとすれば、それは、心を深く耕すこと、書いたものをよく読み返して手をいれることのふたつです。

詩を書くとき、まず最初には、心の中に動くものを感じます。ひらめきとか、インスピレーションといわれるものですね。これはその人独自のものです。他の人の真似をしたり、だれかに教えてもらったりすることはできません。これは詩の核になるいちばん大切なのですが、心は何

層にもなっているものですから、そのひらめきの奥をさぐっていくと、みなさんの心の深いところにある、ひらめきの根にたどりつくことができると思うのです。何人かの人は、思いつきの表面のところですぐことばにしているように思われました。もう少し時間をかけて、思いつきの根を掘ってくださればいいのに、と思いました。そこにもっと豊かなあなたがいるのではないか、という予感を感じさせられたからです。

つぎには、ひらめきの核のまわりにことばが集まり、並べられて、詩の形ができていきますね。むずかしいのは、自分の思ったことをそのまま表現したからといって、読む人に同じ思いを共有してもらえないとは限らないことです。書かれたことばを、読む人の側にたつて、もういちど吟味する作業が必要です。ことに、うたうことを考えると、ことばが的確なイメージを誘い出すか、耳に快く響くかを考えて、表現を磨くことも大切になってきます。これは「推敲」とよばれる作業です。それに、もつと時間と心をかけてはかたと思いましたが、どの詩も、その意味では、もつとすばらしい作品になる可能性をもっていたからです。

以上が私の「注文」ですが、自分の心に浮かんだことばをことばにすることは、どんな場合でもとてもよいことだと思えます。コンクールをきっかけに、みなさんもつと詩や文章を書くことに興味をもつてくだされば、うれしく思います。

卒業生の活動報告

本学を卒業後、オルガニストとして活躍している早野紗矢香さんは「音楽によるアウトリーチ」一期生でもあります。どのようなコンセプトで演奏活動をしているのか、お話を聞きました。(中村公美・記)

中村 早野さんは卒業後も様々なコンサートを企画されていますが、なぜアウトリーチに興味を持ったのですか？

早野 学生時代から、オルガンと言うと「小学校とかにある楽器？」と言われることが多く、知名度の低さを感じていました。こんなに面白い楽器が知られていないなんて！ どうかこの楽器の魅力を伝えたい！ という気持ちからアウトリーチに関わるようになりました。

中村 実際に学生時代に学んだことを教えてください。

早野 アウトリーチの授業を受ける中で、同級生の企画したプログラムを見て意見交換し、コンサートの実施までに必要な事柄をたくさん学びました。コンサートを支える側のスタッフとして参加した時は、お客様の反応を直に見て、出演者とは違う目線で感じる事ができました。出演者とスタッフのチームワークの大切さにも気付きました。両者の連携がうま

くいつていると、印象のよい催しになりま
す。卒業後、自分で企画する機会が
徐々に増えてきて、その時の経験がとて
も役に立っていると感じています。

中村 今はアウトリーチ・センターのスタ
ッフが行っているようなコンサートの裏方
準備も当時、一学生は全て自分たちで
やっていたのですよね？

早野 そうなんです。企画の実現にはプ
ログラム内容の準備と、もうひとつ重要
なのが事務的な作業です。イベントの開
催は、常に主催者や会場スタッフとの協
力で成り立っています。そこでのコミュニ
ケーションは非常に大切です。自分の考え
を伝える時は前もって丁寧に説明する
といった当たり前のことをきちんとする
ことで、スムーズに気持ちよく進めること
が出来ます。お互いの意見を交換するこ
とで、より良いものを作り上げることが
できます。当時は出演者とスタッフの二
役をこなさなければならず、大変でした
がとても充実していました。

中村 コンサートを企画する時に心がけ
ていることがあったら教えてください。

早野 私はプログラムを作る時、どんな
人を対象にして何を伝えたいのかを考え
て企画します。私の場合、オルガンを身
近に感じてもらいたいという思いが根底
にあります。「オルガン＝古典」というイ
メージや「ピアノやエレクトーンと同じで
しょ？」と誤解されることが多いので、オ

ルガンの魅力がどうすれば伝わるのかと
考えます。また、対象となる人たちに分
かりやすい言葉で話すよう心掛けていま
す。自分が当たり前だと思っていること
が他の人にとってはそうでないことも多
く、専門用語などものついでにしまいがち
ですが、音楽になじみのない人には分か
りづらいものです。このように考えると
自分の理解も深まります。



2008年5月5日 いずみホール
撮影：樋川智昭

中村 お話をしながらのコンサートが随
分増えてきていますが、人前で話すのが
苦手な演奏家は少なくありませんよね。

早野 私も初めの頃は緊張してうまく話
せなかったのですが、話すことをすべて書き出
し、台本を作って臨んでいましたが、場数
を踏むことで随分慣れてきました。同じ
物事の説明でも話の進め方、見せ方によ
って印象が大きく違ってきますよね。

コンサート構成や演出のヒントは買
い物に行った時の店員さんの話し方、商

品の見せ方、TVの司会者の間の取り方、
漫才のつかみ、観衆の巻き込み方、ラジ
オのDJといった日常生活のあらゆる場
で見つけることができます。それを自分
なりに消化して、自分のカラーで表現し
ていきたいと思っています。

中村 そんな日常のどこからでもヒント
を得ることができるんですね！オルガン
という楽器について説明するときに何か
工夫している点がありますか？

早野 楽器の説明をする際は、初めて見
る人にとつて知りたいことは何かを考え
ます。オルガンの場合は楽器を間近に見
ることがむずかしいので、よく写真や映
像を使います。会場に写真を張り出し
たり、可能な場合はスクリーンに大きく
映し出したりと、やはり聞くだけよりも
視覚から入る情報があれば分かりやす
く説明することができます。



2008年9月27日 兵庫県立美術館
後ろの壁に教会の写真を映し出しました

最近行なった兵庫県立美術館でのレク
チャー・コンサートでは、持ち運びができ
るポジティブ・オルガンを使用しました。
教会の雰囲気や少しく感じてもらえ
るよう、会場となったアトリエの壁に教会
内部の写真やプロジェクターで大きく映
し出すという工夫をしました。

中村 今年は子どものための企画も二つ
されたのですが、それについてもお聞
かせください。

早野 同じ子どものための企画でも、時
間の長短や参加人数によって、何ができ
るかを検討します。宝塚・ガ・ホールでは
昨年に続いて二回目だったので、初めての
人にも二回目の人にも楽しんでもらえ
るよう工夫しました。子どもが対象の時
は、できるだけ楽器体験の時間を設けて
います。話す時も客席に向かって問いか
けて反応を確認するなど、一方通行に
ならないようにしています。今回は共演
者がいたので、スムーズに進められるよう
話の内容、立ち位置、動きの確認など念
入りに打ち合わせをしました。

これは対象がだれであっても共通です
が、コンサート全体を見た時に、エンター
テインメントとしての面白さと啓蒙的な要
素とがバランスよく入るように心がけて
います。また、自分自身と観衆が同じ時
間、同じ空間を共有していることも忘れ
ないようにしています。

お客様がオルガンを身近に感じ、あつと
いう間に終わってしまったと感じてもら



中村 ありがとうございます！
では、「音楽によるアウトリーチ」履修生
にメッセージをお願いします。
早野 自分にしかできないこと、ウリに
なるものがきつとあるので、それを見つ
けて活かして欲しいと思います。工夫
次第で色んなことが可能になるので、ど
んどんチャレンジしていきましょう。



2008年8月22日 ベガ・ホール
写真提供：(財)宝塚市文化振興財団

えるような面白いコンサートをこれから
も企画していきたいと思っています。

今後の予定

2007年

- 11月22日(土) 子どものためのスペシャル・コンサート *
～すてきだね、日本語の歌！～ (於：神戸新聞松方ホール 15時開演)
11月23日(日) 「音楽の新しい学び」フォーラム 社会に飛び出す音大生たち *
(於：東京音楽大学 14時開始)
11月24日(月) 子どものためのスペシャル・コンサート *
～すてきだね、日本語の歌！～ (於：東京文化会館小ホール 15時開演)
12月13日(土) 子どものためのクリスマス・コンサート *
～みんなで歌おう♪ クリスマス・ソング！～ (於：神戸女学院講堂、要申込)
12月16日(火) 雲雀丘学園小学校アウトリーチ

2008年

- 1月29日(木) 神戸市立医療センター中央市民病院アウトリーチ * 詳細はHPをご覧ください

音楽をお届けします！！

「アウトリーチ」とは、「一歩踏み出すこと」「手をさしのべること」。
大学やホールといった従来の枠にとらわれず、社会のさまざまな場にすてきな音楽のプログラムをお届けします。

- ♪小中学校へ：総合的学習支援プログラムとして、
子どものための楽しい体験学習を！
- ♪病院や美術館へ：催しの趣旨に沿った手作りの音楽
プログラムを、心をこめてお届けします。

お問い合わせは…

神戸女学院大学音楽学部 アウトリーチ・センター
〒662-8505 西宮市岡田山4-1 TEL & FAX : 0798-51-8584
E-mail : outreach@mail.kobe-c.ac.jp <http://www.kobe-c.ac.jp/musicdp/outreach/>

編集後記

12月にかけて、コンサートにフォーラムに、センターは嵐のような忙しさで。(井本)
あっという間に11月！しかしまだまだノンストップで走り続けます！(寺澤)
いよいよ11月のコンサートです。今年は日本の歌を中心に子どもたちに美しい歌声をお届けします。(三上)
08年度も充実させるべく、体に気をつけて頑張るぞー！(南)
気付けば今年度もあと4ヶ月…皆でいいコンサートを作っていきたいと思います。(中村)
2001年以来の念願だった東京公演がもうすぐ実現します。うまくいきますように！(津上)